

ミャンマー連邦共和国における伝統スポーツの社会的機能に関する研究 -マハムニ・ワゾー・チンロン祭りを事例として-

学籍番号 1755005

氏名 菅原 敬弥

指導教員 (主) 田簀 健太郎

(副) 福ヶ迫 善彦

キーワード: ミャンマー, チンロン, マハムニ・ワゾー・チンロン祭り

【序章】研究の課題と方法

本研究は、ミャンマー連邦共和国 (以下、ミャンマー) において約 1500 年の歴史を持つ伝統スポーツであるチンロンが、急速に進む近代化の中でどのように変化し、同時に当該社会の中でどのような機能を持っているかについて、ミャンマー国内で最大規模を誇るマハムニ・ワゾー・チンロン祭り (以下、ワゾー祭り) を事例として、スポーツ人類学的方法を用いて明らかにすることを目的とする。

【第 1 章】調査地の概況

ミャンマーは、東南アジアのインドシナ半島西部に位置する国で、国土の大半が熱帯、または、亜熱帯に属しており、国境を、中国・タイ・ラオス・インド・バングラデシュと接している。国民のおよそ 9 割が仏教徒である。調査地は、ミャンマー中央部に位置し、ミャンマー第 2 の都市といわれるマンダレーである。

2011 年のテインセイン政権発足を機に、1988 年より 23 年続いた軍事政権が幕を閉じ、事実上の民主化を果たすと、国際社会からの経済制裁が次第に解除されていった。

以降、外貨の流入や文化の輸入により人々の暮らしは一気に近代化していったのである。

しかし、スポーツにおいては、未だ国際社会に比べて遅れをとっていると言わざるを得ない。軍事政権下においてスポーツ政策に力を入れられる財政状況ではなかったことが要因の一つであったと考えられる。体育教育がないがしろにされてきた歴史も少なからず関係するであろう。

調査対象とするのは、ミャンマー国内で約 1500 年続くといわれているチンロンである。チンロンは、6 人が円陣を組み、籐を編んでつくられたボール (ボールの名前もチンロンという) を落とさないように蹴りながら、様々な技を繰り出していくミャンマーの伝統スポーツである。チンロンは、本来競わないということが特徴の一つにあげられる。6 人は、助け合いながらボールを繋ぎ、仲間の求めるパスを出すよう心がける。もともと仏教と関係が深いといわれているスポーツであるため、その精神性がチンロンの中に散りばめられているといえる。街の中には専用のチンロン場も存在す

るが、街中を歩けば路地などでもチンロンをしている様子を観ることができる。国内において伝統的に行われ、人々に親しまれてきたチンロンであるが、現在は国際的な広がりも見せている。その発端となったのは、カナダ人のグレッグ・ハミルトンが製作した MYSTIC BALL という映画であろう。この映画によって、チンロンの魅力が世界に発信されたことは、その後、カナダやアメリカ、ヨーロッパなどからチンロン入門者が現れたことに見てとれよう。また、近年では、チンロンの国際大会が行われるようにもなった。これまでも国内用のルールで競技が行われてはいたが、国際大会用のルールが考案、整備され、東南アジアを中心に大会が行われるようになっているのである。

【第2章】マナムニ・ワゾー・チンロン祭りの実際と機能

本研究で事例とするワゾー祭りは、1928年から続くチンロン祭りで、ミャンマー国内でも最大規模を誇る。

マナムニとは、祭りが行われる僧院の名称であり、マンダレーにおける仏教信仰の中心となっている。ワゾーとはミャンマー暦における月区分のひとつを意味している（7月頃）。この祭りが行われる期間は、その年の参加者数によって変動するが、調査を行った2018年は、5月30日から7月28日までの60日間であった。また、参加チームは約1,800、参加者数は延べ約10,000人であった。

ワゾー祭りでは、毎日朝9時から夜12時まで途切れることなくチンロンが披露され続ける。1チームの持ち時間が30分であるから、1日に30チームがチンロンを披露することになる。

ワゾー祭りの最たる目的は、祭りが始まった当初から今も変わらず、マナムニへの寄付を集めることであった。参加者や観客から集められた寄付金は、ワゾー祭りの最終日にマナムニに寄進され、僧院の修繕や運営費として充てられる。加えて、ワゾー祭りの特徴として、参加チームは参加料を支払うことが挙げられるが、この参加料は、ワゾー祭りの運営費に充てられた後、それが余った場合には、マナムニへ寄付されるのである。この仕組みでは、祭りの規模が大きくなるにつれて寄付額も大きくなると考えられ、祭りの盛り上がりがチンロン祭りにおける寄付機能の優劣を左右するとも考えられる。これに従えば、国内最大規模のチンロン祭りであるワゾー祭りが、高い寄付機能を持っていることは想像に難くない。

参加者にとってワゾー祭りは、単にチンロンを蹴って楽しむ場として機能しているだけではない。ワゾー祭りが、全国からチンロン関係者が一堂に会する場であることから、そこでチンロンを蹴ることは、プレイヤーとして特別に力が入るとも考えられるし、プレイの内容いかんでは、プレイヤーとしての名声を高めることにも繋がると考えられる。他方で、参加者に行ったインタビューなどから、ワゾー祭りが、古い友

達や新しい友達と近況を報告しあうなどの交流の場になっていることも明らかとなった。また、近年は外国人プレイヤーの参加も増加している。この現象の発端となったのは、前述の映画が公開されたことであり、これを観てチンロンに興味を持った人々が、現地を訪れて、実際にチンロンを行うという、一種の参加型スポーツツーリズムが沸き起こっているのである。

ワゾー祭りは最後の1週間に最大の盛り上がりを見せる。普段は滅多に観ることができないような豪華なチームによるパフォーマンスが多く行われるからである。そこでトッププレイヤーによるチンロンを見物することは、観客にとって娯楽としてはもちろんのこと、チンロンに対して憧れを抱く場としても機能しており、チンロンの競技人口の裾野を広げる装置としても働いていると考えられる。加えて、ミャンマー人である観客が外国人プレイヤーによって行われるチンロンを観ることは、観客自身に、ミャンマー人であることと、チンロンがミャンマーのスポーツであることを再確認させることにもなると考えられる。

【第3章】チンロンを取り巻く環境と機能

本章では、チンロンを取り巻く組織として、特定のチンロン教室を取り上げ、チンロン教室の社会的機能について考察する。方法としては、コーチと教室参加者である生徒及びその親に対してインタビュー調査を行い、加えて、筆者自らも生徒の一員となって練習を行いながら観察を行った。

対象とする教室は、マンダレー市内に拠点を置き、現在は15人ほどの生徒が通っている。練習は毎日行われ、午前と午後の2部構成となっている。土日祝日は特に生徒が多く、練習場は活気付いている。コーチを務めるM氏は、チンロンの世界で最も有名なコーチの一人である。この教室では、生徒から会費を徴収しておらず、加えて、明確な組織体制もないため、教室関係者による積極的な運営参加が教室を維持させているとみることができる。

この教室では、職業としてのチンロンプレイヤーを目指すものも少なくない。プロになるとそれなりの収入を得ることができるということが理由のひとつに挙げられよう。

教室ではチンロンの技術だけではなく、教室内における規範や礼儀も教えられている。生徒間でもその教えが浸透していて、年上の生徒が年下の生徒に教えてあげるといった光景も日常的に確認することができた。教室には、生徒以外にも、親やこの教室を拠点にするプレイヤーなどが集まり、チンロンのプレイを囲んで談笑するなど、日常的にコミュニケーションを図る場にもなっていることが示唆された。また、教室がひとつの単位として働くことで、外部の教室、あるいはチンロン場と協力関係を構築する組織としての機能を有しているともいえよう。そのように教室がひとつの単位とみなされる場合においては、教室の関係者に成員であるという帰属意識が生じているとも示唆された。

この教室は、外国人プレイヤーのミャンマーにおける練習拠点にもなっている。彼らの中には、この教室で学んだ技術を自国に持ち帰っては、チンロンの組織を形成し、そこでチンロンを教えるといった活動をしている者もいる。加えて、その様子をYouTubeやFacebookなどに投稿することで普及を図っている様子も窺うことができる。このような、外国人プレイヤーによる活動は、海外でチンロンを伝承させていくことに結びついていると考えられる。また、この教室は、ツアーの企画としてチンロン祭りを行ったり、外国人入門者を積極的に受け入れたりすることによって、チンロンを海外に普及させる役割の一端を担っているともいえよう。

【結章】まとめと結語

以上のことから、ミャンマーにおけるチンロンの社会的機能について明らかになった点についてまとめる。

チンロンは、国民に伝統的なスポーツであると認識されている一方で、老若男女が場所を選ばず行うことができることから大衆的なスポーツとして親しまれている。ミャンマーでは、チンロンを行うことが健康に良いと認識されていることから、生涯スポーツとして機能しているといえる。また、「競い合わない」という特性から、チンロン特有のコミュニティが形成されており、協調性や尊敬心といった仏教思想に通じる精神性は、当該社会における人間教育の装置としても機能していることが示唆された。

その一方で、近年、国際大会として行われるチンロンにおいては、ミャンマーが国家としての国力や威信などを対外的に国際社会に示すことと同時に、多民族国家であることから、ミャンマー人であるというアイデンティティの確認装置としても機能しているといえよう。

また、チンロンを題材にした映画が公開されたことに加え、SNSやYouTube等の普及も後押しして、外国人プレイヤーによる参加型スポーツツーリズムが沸き起こっている。すなわち、チンロンがミャンマーを内外に知らしめるコンテンツとして機能しているともいえよう。

以上、チンロンには、これまで国内で伝統的に行われてきた方法による社会的機能と、近年の国際化という近代化の波の中で変容しつつある社会的機能という二つの側面が共存していることが明らかとなった。

【参考文献】

石井隆憲著：『チンロンの神髄』明和出版、2012.

チン＝ウ・バティン著、石井隆憲監訳、石井隆憲、ウ・リーナイン訳：『ミャンマーにおけるチンロンの歴史』東洋大学アジア文化研究所・アジア地域研究センター、2010.

田中義隆著：『ミャンマーの教育-学校制度と教育課程の現在・過去・未来』、明石書店、2017.

田村克己、松田正彦編著：『ミャンマーを知るための60章』、明石書